



2017 November 9

宮崎日日新聞主催 第15回「新聞」感想文コンクール 中学生の部」において、3年生の永山夢姫さん(国富小出身)が優秀賞を受賞しました。この作文は夏休みの課題として書いたもので、自身の試合結果を伝える新聞記事を読んだの様々な思いが綴られています。

本校の1・2年生は新聞記事に対する意見を書く「ハッピーノート」、3年生は教員が選んで掲示した新聞記事に対して感想を書いた付箋を自由に貼る「ハッピーボード」という課題に、それぞれ取り組んでいます。視野を広げ、考える力を育み、心を豊かにすることを目的として、永山さんの受賞は学校みんなの大きな喜びです。

第15回「新聞」感想文コンクール

第15回「新聞」感想文コンクールの入賞者12人、学校5校が決まりました。小、中学生の部それぞれ最優秀賞、優秀賞、特別賞に輝いた6作品を紹介する。(作品は基本的に原文通り、敬称略) 21面に関連記事

新聞掲載

「優勝、おめでとう！」

この夏、中学校生活のほとんどをかがんばって来たテニスの部活動が終わった。最後の大会で、団体戦三位、そして個人戦のダブルスで優勝することができた。優勝したその時は、ほとんど実感がなかった。しかし、私がおぼろげに「優勝」を感じることができた瞬間があった。それは、翌朝の新聞を見た時だ。そこには、試合の結果があった。優勝までの一つの試合の結果を見ながら、その時のことが鮮やかに



宮崎市・宮崎第一中3年 永山 夢姫

中学生の部 優秀賞

努力を認めてくれた新聞

によりがえってきた。決勝戦の「6-4」という結果。そのたった「文字の」の数字のなかに、どれほどの緊張と悔しさと喜び、そしてそこにたどり着くまでの努力が込められているか。ゆっくりと試合を思い返しながら、優勝できたことを確信できた。そこに、優勝を実感させてくれたのが、新聞を読んだ人からの、「おめでとう」という声だ。親せきや学校の友達だけでなく、遠く離れた人からも祝福のメッセージが届いた。しばらく連絡が無かった知り合いからも、久しぶりの連絡がきたほどだった。そのた

びに、私の喜びは、何倍にもなった。私がおぼろげに書いた記事は、そんなに大きいものではなかった。それでも新聞で見つけ、連絡をくれた人がいた。母は、電話が来た久しぶりの知り合いと会話を弾ませ、笑顔になっていた。新聞の影響力の大きさに驚いた。自分一人の嬉しいという気持ちが、文字というはつきりとした形になり、それが多くの人に伝えられることにより、広く認めてもらえたという大きな喜びとなって返ってきた。これまで新聞は、社会全体で起きている事件や事故などを、正確にそして詳しく、たくさんの人に伝えるという役割があると思っていた。しかし、こつこつと一人の小さな努力を認めてくれ、遠く離れた人々を結び付けてくれる、そんな働きもある事を知った。中体連の大会の翌日、団体戦で優勝した他校の記事が大きく載った。そこには、試合では分からなかった、その学校の努力が取材されていた。自分たちががんばってきたと思っていたが、その学校がこれまでどれほど練習を積み重ね、チームのみながどんな気持ちで試合に臨んでいたかが書かれていた。それを読むと、負けた悔しさはあったが、相手にチームへ拍手をおくりたくなった。それは、今回の中体連だけに限らない。昨年のオリンピックやこの夏の世界陸上などの記事でも、時差の関係でリアルタイムに知ることができない結果や、テレビでは聞き流してしまいう二ニュースも、新聞では文字と写真という形で、じっくり知ることができる。試合の結果の裏にある、数々のドラマを知り、涙することもあった。また、中学生になり別の学校に離れた友達も、おぼろげに知っている姿も知ることができた。文字の奥にある、人の心や努力の大きさを感ずることができた。三年間の部活動で学んだことは、たくさんある。その中で、一番大きな事が努力することの大切さだ。他校の努力を知るたびに、自分たちの練習量の足りなさを感ずるようになった。不安に押しつぶされそうになり、心が折れかけたこともあった。しかし、そんな時に支えてくれたのは、家族や仲間だった。プレーがどんなに悪くても、絶対に応援をしてくれた。いつも私たちの味方だった。だから、それを心の支えに、一回一回の練習を大切に、努力を重ねることができた。そんな私たちの努力を、新聞は認めてくれた。周りの人のおかげで、今の自分がある。感謝の気持ちでいっぱいだ。新聞を通して、遠くの人やたくさんのお世話になった人たちに、努力と感謝を伝えられたことは、幸せなことだ。これからも、新聞の言葉の奥にある人の思いや努力を感じていきたい。